

キュア中心からケア中心へ、看護 ICT で一步先へ

鹿児島大学病院 医療情報部 部長兼副病院長
宇都 由美子

相馬泰子大会長の下、記念すべき第 20 回日本医療情報学会看護学術大会が開催されますことを、心よりお慶び申し上げます。気が付いたら、日本医療情報学会 (Japan Association for Medical Informatics : JAMI) の看護部会のメンバーの中で私が 1 番古株になってしまっており、このような機会をご恵与いただけたと、心から感謝申し上げます。

1985 年、私たちの先輩は看護情報のシステム化に関する課題研究会を組織し、15 年間にわたって我が国の看護の情報化の発展に尽力されました。その後、2000 年より JAMI 看護部会が発足し、看護情報研究会として、その活動を引き継ぎました。長きにわたる活動の結果、看護情報研究会における論文や発表の品質が向上してきたと JAMI における評価が高まり、現在の「JAMI 看護学術大会」へ発展してまいりました。

私はかつて第 1 回の研究会講演集の冒頭の挨拶で、「看護領域のコンピュータ化は遅れていると指摘されてきた」と書かせていただきました。それから 20 年の歳月を経て、相馬大会長が「看護の知と技の継承～看護師がすること、AI・IoT に委ねること～」と、まさに時宜を得た大会テーマを掲げられました。

多職種協働によるチーム医療が推進される中、看護の専門性や存在意義の確立はますます重要になってきました。医療チームが補完し合って活動していく中で、看護のアセスメントやマネジメントなどの専門性について、我々看護職は新たな情報発信に務めていく必要があります。また、地域包括ケアシステムの進展を目指す中で、厚生労働省は 2015 年 6 月に『保健医療 2035 提言書』を出し、『キュア中心からケア中心へ』を挙げています。しかし、具体的な方策は茫漠としており、まさに看護職自らが切り拓いていかなければなりません。

私たち看護職はことほど左様に国民に期待されているのです。看護を取り巻く状況は厳しさを増すばかりですが、ICT (Information and Communication Technology : 情報通信技術) は着実に進歩しています。最近では医療における AI (Artificial Intelligence : 人工知能) の研究が急速に進んでいます。看護における AI の活用など明るい展望も期待できますが、なにより AI に機会学習させる教師データを、私達看護職がどれほど持ち合わせているかが重要なのです。

『キュア中心からケア中心へ』、時代は看護職の更なる活躍を待っています。ゆるぎない専門性に裏打ちされた価値ある看護の業を、ICT を上手に活用しながら、さあ、一步先へと進みましょう。

略 歴

1979 年 熊本大学教育学部 卒業。同年 鹿児島大学医学部附属病院看護部 入職
1984 年 同大学医学部附属病院医療情報室 兼務。1989 年 同大学医学部附属病院医療情報部 助手
2000 年 同大学医学部保健学科看護情報学講座 助教授
2005 年 かがしま医療 IT センター 代表取締役社長。同年 かがしま保健医療福祉サービスを考える会 理事長
2006 年 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 准教授。2011 年 同大学病院医療情報部 部長
2017 年 鹿児島大学病院 特任副病院長 (経営分析広報担当)。現在に至る 博士 (医学)